



楓の誉

R5.9.4(第5号)

文責：瀬上 佳宏

全国学力・学習状況調査の結果を受けて

前期後半が始まって一週間が経過し、九月になりました。とは言え、「記録的猛暑」と言われた真夏のような暑さが続いている中、学校では、引き続き熱中症対策に十分配慮をしながら教育活動を始めたところです。

さて、夏季休業中に全国学力・学習状況調査（以下、「全学調」）の結果が公表されました。熊本県教育委員会は、「本年度までに、平均正答率が全教科で全国平均を上回る」という目標を掲げていましたが、県内公立小中学生の平均正答率は、国語、算数・数学、英語の全教科で全国平均を下回るか、ほぼ同じという結果で、目標を達成できませんでした。

このような残念な結果になった原因や背景については、県教委、各教育事務所、各市町村教委、さらには各学校で、今後、分析・対策していくものと思います。しかし、私（校長）は単純に、「ここ数年の極めて深刻な教員不足」がその最たる原因ではないかと思っています。「必要な教員数を確保できていなくて、学力向上もへったくれもないだろう」というのが率直な感想なのです。

また、本県は「熊本の学び推進プラン」を掲げ、学力向上を含めた子供たちの学びの質の向上を目指してきました。この構想（とりわけ授業改善に係る）は、絵に描いたように理想的なものだと思いますが、それらの学校現場への下ろし方については、以前の「熊本型授業」

を提唱していた頃と、あまり変わらないように感じています。つまり、県教委が授業モデルを作り、冊子やパンフレット等で周知。その後、浸透を図るための教職員向けの研修会等を開催。併せて、実践校を指定したり実践事例を収集したりして、授業改善案をまとめた事例集を配布。大体こんな感じでした。

前例踏襲のやり方で、県が考えている構想を、現場の教職員一人一人の日々の授業にどれだけ反映させることができたのでしょうか。もし授業改善できたのであれば、今回の全学調は：。同じ行動を繰り返し、違う結果を期待したようにも見えてしまいます。もしくは、学力向上の「一丁目一番地」は、そこではなかったのかもしれないと思ったりもします。

ところで、今回の全学調の本校の結果はというと、県の結果とは裏腹に、とても良好でした。競争や序列化を煽ることにならないよう、数値でのお示しは控えますが、全国平均・県平均を「かなり」あるいは「大きく」上回っていました。以前の学校便りや学校HPで、とても「優秀」とお知らせしていた昨年度の三年生（現高一）に、全く引けを取りません。また、現三年生の場合、一年時の県学調では県平均並みあるいはやや下回る教科があったことを鑑みると、中学生になって大きく学力を向上させたことになりました。つまり、「もともと」あるいは「たまたま」学力が高かったわけではなく、「楓の森中メソッド」が、学力向上においても、いかに効果的かつ合理的なものであったかを、見事に証明してくれました。

ただし、全学調の実施は四月なので、令和三・四年度の成果ということですね。令和五年度の本校は、一学級増に対し二名の教職員減。さらに休職者もいる状況で、過去二年同様の好結果の維持は、至難の業かもしれません。

「協働」と「貢献」を進める秋に

本便りの第一号（四月号）でお知らせしたとおり、本校の学校教育目標は過去二年と同様（夢と誇りを持ち 自分らしく 主体的に行動できる生徒の育成）ですが、本年度は加えて、「協働」と「貢献」をキーワードに学校経営を進めることにしています。

この夏休みの間にも、この二つのキーワードに関わる活動がありました。その一つが、本校野球部員の菊池恵楓園入所者自治会の 太田 明 副会長との野球での交流です。

また、菊池恵楓園の慰霊祭で飾る「竹灯りボランティア」の講習会に、有志の生徒が参加しました。

さらに、鳥栖西中との第二回目の交流として、鳥栖西中の人権集会で視聴してもらっためのハンセン病問題学習を中心とした合志楓の森中の紹介ビデオを作成したり、十月一日（土）に予定の熊本県人権子ども集会（オンデマンド開催）で行う、合志楓の森小・中の実践発表のスライドを作成したりなど、生徒会執行部や人権委員会を中心に、今後の「協働」や「貢献」のための準備も行ってきました。

今までは、代表生徒中心でしたが、竹灯りボランティアなど、今後は自主的に参加できる活動が増えてきます。多くの生徒が「協働」と「貢献」に関わり、豊かな人間性を育んでほしいと思っています。創部二年目にして見事に県コンクールで銀賞を獲った吹奏楽部も、今年度は菊池恵楓園内で演奏できそうですね。



太田副会長とキャッチボール



学校HPの
QRコード